

ユダヤ難民を救った

樋口季一郎中將の思い出

伊佐 二久 陸士55

以下は、埼玉陸士60期生会編集の『秩

父』（136号、平成29年7月号）に「数千人のユダヤ人の命を救った樋口季一郎中將」という見出しで川島順氏が発表されていたが、埼玉60期生会のみならず借行会員などに広く知ってもらいたいと思い、川島氏のお許しを得て樋口中將について『借行』に発表させて頂くことにした。

樋口中將は数千人のユダヤ難民を救ったほか、終戦後ソビエト軍の北海道占領を防ぎ、戦後の日本国発展に大きく寄与されているが、ドイツやソビエトに気兼ねした日本政府は公的には発表していないため、一般の人たちは殆どご存知ないと思っている。

この事実に関する著書は『樋口季一郎回想録』樋口季一郎著、『ユダヤ難民を救った男』木内是壽著、『流水の海—ある軍司令官の決断』相良俊輔著、その他があるが読まれた方は、ご存じと

思つ。
私（筆者）は終戦前年の昭和19年、アリュウシャン列島アツツ島山崎部隊救援のため動員下令、明日小樽港から

出発という時突然中止、その時は残念がったが、行っていれば米海軍に撃沈され海の藻屑となったであろう。

その後北千島幌筵島、占守島の守備にあたり、北海道旭川歩兵第26聯隊（聯隊長内田辰雄大佐）の機関銃中隊長として勤務していた。

その時の北部軍司令官は樋口季一郎中將であつたが、下っ端の私は一度ご挨拶しただけであつた。

その年の秋、私は予科士官学校の区隊長を命ぜられ東京に赴任したが、北千島にいたらソ連軍の攻撃で戦死か、生き残つてもシベリア抑留されたであろう。

1938年（昭和13年）3月、樋口中將は満洲国特務機関長を勤めていたが、その時ナチス・ドイツに迫害されたユダヤ人難民数千人が、命がけで満洲国に入国を希望したが、ソ満国境のオトポール駅で入国を禁止されていた。

この時ユダヤ人協会会長のカウフマン氏から救助の要請を受けたが、友好国のドイツからの抗議が予想されたこと、特務機関長として過剰対応ではないかという逡巡から、一時はためらわれたが、熟慮の末「ユダヤ難民をすべて満洲国に受け入れること、更に一切の責任は自分が負う」と回答された。

これを聞いてカウフマン氏は感激し

て泣きぬれたという。

樋口機関長は直ちに必要書類をそなえ、満洲国外交部にユダヤ人難民に入国ビザを発行するよう指示した。またユダヤ難民輸送のため列車を緊急手配するよう満洲鉄道本社松岡総裁に要請している。

更にユダヤ人の食料、衣類を与え、病は治療してやるなど、そのため命を救われた難民は数千人に及ぶと言われる。

この状態を知ったドイツ政府は激怒し日本政府に激しく抗議し、樋口特務機関長の処罰を要求したが、関東軍司令部は人道的処置としてドイツ政府の抗議を無視している。

その後樋口中将は本土に転動し、北海道札幌の北部軍司令官に就任、その後第5方面軍司令官兼北部軍管区司令官となり、終戦を迎えることになる。終戦後に拘わらずソビエト軍は北海道占領の目的で日ソ中立条約を破って南樺太や北千島に侵攻した。あまり知られていないが南樺太の日本郵便局の女性職員が全員自決している。

終戦直後で日本政府は機能は麻痺状態であったため、樋口司令官は独断でソビエト軍に反撃を指令し、ソ連侵攻部隊を壊滅させた。これでソビエトの北海道占領は挫折したが、千島列島は占領されてしまった。

もしも日本軍が終戦後と言うことで反撃しなかつたらソビエトはやすやすと北海道を占領し、今の北朝鮮のようになつて戦後の日本繁栄は望めなかつたかもしれない。

しかしこの戦闘が終わつた後生き残つた将兵はシベリアに抑留され、大半が凍死、餓死している。60万人もの将兵が戦後もシベリア抑留されたのは正に戦争犯罪と言ふべきであらうが東京裁判では「勝てば官軍」で問題にもされていないのは残念である。

私の同期生故長島厚君はその時司令部勤務であつたが、停戦交渉のためソビエト軍司令部に派遣された。始めは死を覚悟し一人で行くつもりだったが部下の強い要望で2名同行3名で出向した。

和平交渉だからと白旗を掲げていったのに、ソビエト兵から銃撃を受けたが幸い無事で司令部に到着した。ここでは厳重に検査され軍刀も取り上げられた。

ソ連の司令官と会い持参した書類を提示したが、書類は印鑑だけでサインがないから受け取れないと強硬な態度で拒否した。

そこで怒つた長島君は「受け取らないならここでハラキリする」と怒鳴つた。相手もハラキリを知っていたらしく

態度が和らいで書類を受領し、正式の和平交渉へと進展することが出来た。

その後の和平交渉中、ソビエトの司令官が「君のハラキリのおかげで交渉する気になつた」と褒めてくれたという。彼はその功績にも拘わらず3年間シベリアに抑留されている。

帰国後彼と会う機会があつたがハラキリについて「外国にも武士の情けを知る人がいる」と述懐していたのを記憶している。

読者の皆様この戦闘のおかげで北海道が助かつたことを知つて頂きたいと思つている。

その後北海道占領に失敗したソビエトは樋口司令官の引き渡しを米軍に要求したがマッカーサーは断固として拒否している。

その背後には満洲国入国を許されて数千人の命を助けられたユダヤ人協会の恩返しへの気持ちもあつたと思われる。これが最終的に米国防総省を通じてマッカーサーに通じた思つている。

終戦後樋口中将は多くの企業や機関から顧問などを依頼されたが、すべて断つて82歳で逝去されている(1888~1970)。

樋口中将は1942年(昭和17)8月北部軍司令官としてアッツ島救援、キスカ島守備隊の撤退を指揮されてい

る。

1943年(昭和18)アッツ島の山崎部隊(2600名)が玉砕したが救援予定が中止になつたことは前述した。その後キスカ島撤退作戦が7月15日予定されたが、霧が晴れたため中止、7月29日第2回が霧の中で行われた。この時樋口司令官は大本営の許可を求めず独断で守備隊の小銃などすべての武器を海中に投棄させている。

そのおかげで救援の巡洋艦2隻、駆逐艦6隻に守備隊員5200名が僅か55分で乗船可能となり米軍に発見されず霧の中を安全に撤退することが出来た。

8月15日米軍は100隻、3400名の大軍がキスカ上陸したが、日本軍撤退は全く知らず、同士討ちして死者100名負傷者多数を出している。

樋口中将の卓越した洞察力、指導力が無血撤退を可能にしたと思つている。

因みにキスカ撤退部隊は私が所属していた旭川歩兵第26聯隊の穂積部隊で同期生の故熊谷惇君もいた。彼は、初めアッツ島に上陸した後で山崎部隊と交代してキスカ島に移動したため助かつたもので、戦争は紙一重で運命が決まることが痛感している。

以上樋口季一郎中将のご功績を紹介させていただきます。